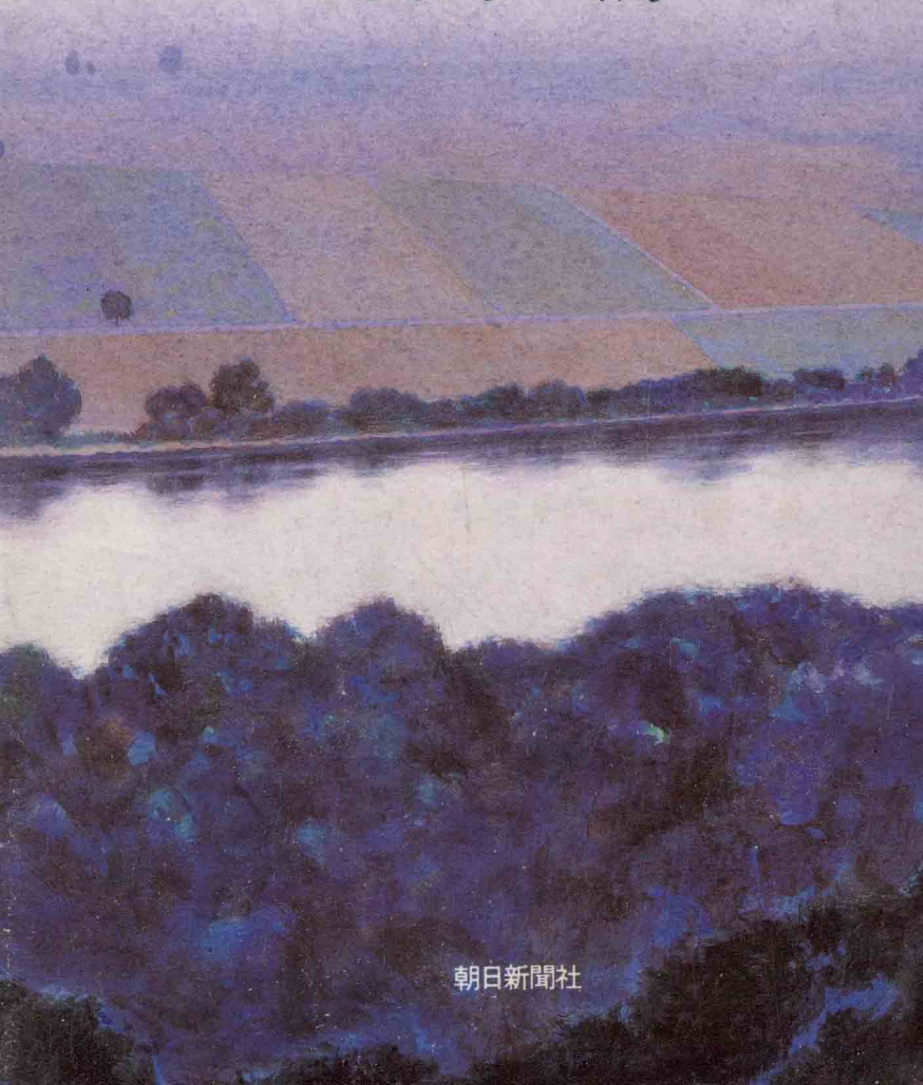


# ドナウの旅人

下

宮本 輝



朝日新聞社

# ドナウの旅人

下

宮本 輝



朝日新聞社

ドナウの旅人 下

定価 一二〇〇円

昭和六十年六月三十日 第一刷発行  
昭和六十年七月三十日 第三刷発行

著者 宮本 輝

発行者 川口 信行

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五ノ三ノ二  
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)  
編集・図書編集室 販売・出版販売部  
振替 東京〇―一七三〇

ISBN4-02-255360-X

©T. Miyamoto 1985 Printed in Japan

目次

|        |     |
|--------|-----|
| オペラハウス | 5   |
| 二つの街   | 76  |
| 黒い瞳    | 154 |
| セルビアの血 | 216 |
| 葡萄の道   | 277 |
| 鉄路     | 336 |
| さいはての雪 | 362 |
| あとがき   | 397 |

装画  
安久利德  
装丁  
熊谷博人  
地

ドナウの旅人  
下



## オペラハウス

まったく人<sup>ひと</sup>気のないオルトリープ通りの中程でタクシーは停まった。長瀬は、ホテル・ザッハーを出てからひとことも発しないまま、ずっと絹子のことに思いをめぐらせていた。絹子の酒の飲み方は、もはや尋常ではなく、酔いが醒めたあとの言動も、いさか常軌を逸していたのである。絹子は、酔っているときは、一緒にいつまでも生きたいと、叫びに近い声を張りあげて長瀬の肩を揺すったり、床に跪<sup>ひざまず</sup>いて手を合わせたりした。そして、酔いが醒めたあとは、もうどうする術<sup>て</sup>もないのだから早く一緒に死のうと、沈鬱<sup>ちんうつ</sup>な、けれども気がふれた人がしばしば垣間見せるぎらつきの目を落ち着きなく動かして、思いも寄らぬ詮索を始めるのだった。それは、麻沙子に対する罵倒がいつも口火となった。「自分の母親を探しに来たくせに、ドイツ人の恋人を連れてくるなんて、あの子もちゃっかりしてるわ」

絹子は肩で息をして、ベッドカバーや枕を放り投げる。やがて、

「麻沙子が一緒だと、私の体なんかにさわりたくなくなるでしょう。私がどんなにお婆さんか、道雄は毎日思い知らされてるようなもんよ。あの子は、そのために、つきまどってるのよ。私もいやだわ。」

あの子といると、自分が五十歳だつてことを見せつけられてるみたいよ」

そんな言葉を、なけば涙声でまくしたて、最後は、

「麻沙子を好きなんでしょう？　生きてるのは、麻沙子を好きになったからでしょう？　そうに決まってるわ」

と叫んで、旅行鞆の中身を全部放り出したり、ベッドの上で足をばたつかせたりして、殆ど狂乱に近い様相を呈するのだった。きのうの朝も、今朝もそうであつた。長瀬は辟易し、なだめる気力もなかった。知り合つてからバツサウでいったん別れるまでの絹子と、ウィーンで再び逢つた絹子とは、まったく別の人格であるような気がしたが、長瀬は絹子をそんなふうにさせてしまった自分の軽率な出来心を責め、絹子への深い謝罪の心で、ただ黙している以外なかつたのである。

長瀬は、シギィと麻沙子の配慮に感謝しつつも、ウィーンで尾田敏という男と対峙したかつた。どちの筋か。銀行か、やくざか。その両方なのか。それともどちらでもない、長瀬の知らない何者かの配下なのか。彼は確かめてみたかつた。いずれにしても、尾田は、長瀬がこのまま旅をつづけるとすれば、南ヨーロッパであろうが、共産圏の東ヨーロッパであろうが、難なく追ってくるだろう。小泉の下宿で、尾田の話し方を耳にしたとき、長瀬は正体不明の中年男が、その道のプロであることを瞬時に知つて、そう思った。絹子のことも思い合わせて、長瀬は「セビアの理髪師」を、シギィや麻沙子や留学生たちと天井敷で観るのを、あらゆるものへの別れの儀式にしようと決めていた。

そんな長瀬には、一抹の頹廢を、理知的で育ちのよきそんな顔立ちや言葉つきに持っている庄野絵美が、自分と同じ死への志向に心の半分近くを傾けていることが判るのであつた。それで彼は、無礼な臆測を投げかけてみたのだが、平家物語の一節を即座に返されて、心の半分どころではなく、絵美のすべては死の淵をさまよっているのを知つた。——見るべき程の事は見つ、いまは自害せんとて……。

その平家物語の、新中納言の言葉は、たとえ古典からの引用だとしても、女性らしくなかった。長瀬は、そのことになにかしら興味を持ち、絵美の苦しい恋の相手を見てみたくなっていたのである。

絵美は三階建ての石造りの家を見あげ、

「この二階ですよ」

と言って、木の扉をあけた。豆電球がひとつ灯っているだけで、建物の中には物音がなかった。コンクリートの通路の左側に部屋がふたつ並び、その隣には地下室への階段があった。絵美は一階の二部屋を指差して麻沙子に言った。

「この部屋だけ、前とおんなじ人が住んでるのよ」

「フィンランド人のヴァイオリニストと……」

「タイ人のピアニスト」

「絵美より一年ほど前からいたんでしょう？ だったら、もう八年以上もいるわけね」

突き当たりの窓から、黄色い薔薇の咲き乱れる中庭が見えた。狭い階段は、建物の真ん中を渦巻状に昇っていた。二階の最初の部屋に、ローマ字で書かれた小さな表札が掛かっていた。麻沙子は、

「これ、前とおんなじ表札ね。日本から持ってきたの？」

と訊いた。絵美は灰色のペンキを塗ってあるドアをあけながら、

「私、二年前に日本へ帰るとき、この表札は捨てるつもりでゴミ箱に突っ込んでいたの。そしたら、大家さんが捨てないで取ったんですって。十日前、ウィーンに着いて、まっすぐこの下宿に来たのよ。そしたらドアにこの表札が掛かってたの。びっくりしたわ」

そう言って、ちらっと長瀬を見た。

「絵美は、この下宿人では一番の優等生だったのよ」

麻沙子が日本語で言った。

「学校ではじゃなくて、下宿ではね」

絵美は微笑み、台所の明かりをつけ、みんなに入るよう勧めてから、

「きのう、やっと片づいたばかりだから、いまが一番整頓されてるってわけ。どうぞ遠慮なく」と言った。絵美の部屋は、小泉の部屋より小さかった。小泉の下宿は二部屋だったが、絵美の下宿は、台所も小さく、その向こうに居間兼寝室があるだけだった。部屋の隅に、相当使い込まれ、人形の凹みが出来ているベッドがあった。長瀬には、ひどく寂しげな、それでいてたまらなく寝心地のよさそうな凹みに見えた。

窓ぎわにランド・ピアノが置いてあった。長瀬は若い女性の一人住まいの部屋に入ったのは初めてであった。長瀬は、部屋のあちこちに目をやりながら、シギィと並んで椅子に坐り、麻沙子と絵美の会話を聞いていた。

「このピアノ、前にあったのと違うのね」

「船便で自分のピアノを送るつもりだったんだけど、ウィーンに住んでる知り合いが新しいのを買ったからあげるって言うの。それで、貰っちゃった。一年くらい倉庫にしまってたから、おととい調律師に来てもらったのよ」

「いいピアノね。こんなのを気前よくくれる人って、どんな人なの？」

絵美は聞こえなかったような振りをして、台所へ行き、プラスチックの容器に数個のおにぎりを盛って帰ってくると話題を変えた。

「この部屋の家賃、前より二百シリングあがって、千六百シリングになったのよ。高いつて文句を言ったら、家主のお婆さん、百シリングまであげる代わりに日曜日は庭の樹や花に水をやってくれ、

ですって。そんなに大きな庭じゃないけど、結構手間がかかるのよね。家賃を百シリング安くしてもらうために日曜日の一、二時間をつぶすなんて割が合わないって思ったけど、家主のお婆さんも二年逢わないうちに随分体が弱ったみたいなの。もう八十歳なんだもの。気の毒だから、庭の水まきを引き受けちゃった」

長瀬は、横の壁ぎわに並んでいる本棚と、日本製ではない中型の鏡台に目を移した。マニキュアの壘が一本、ぼつんと鏡台の端に立ててあった。彼は、いまはすでに人妻となり、ふたりの子の母となつたかつての恋人のことを思い出した。深い関係が一年半つづいたが、彼には最初から結婚の意志はなく、そのうち女のしおらしさにほだされて、一緒になつてもいいなと考えだしたころ、女に新しい恋人が出来たのであった。女はふたつ歳下で、金沢から上京し、女子大を卒業すると、そのまま東京の中堅出版社に就職した。友人を介して知り合つたのだが、長瀬は一度も女のアパートの部屋に入らなかった。

彼はマニキュアの壘を見つめたまま、いったいそれはなぜだったのだろうと思った。夜遅く、アパートの前まで送つたことは何度もあつたし、部屋にあるよう誘われたことも幾度かあつた。しかし、彼はそうしなかった。女の体が欲しいときはホテルを使った。自分なりの理由があつた筈なのに、長瀬はそれをどうしても思い出すことが出来なかった。ただ、長瀬がある寒い夜、結婚の意志をほのめかしたとき、女が言つた言葉は忘れてはいなかった。

「私を人間だとは思ってないのね。あなたは自分の都合と、そのときの気分だけの人よ」

結婚してもいいと考えたのは、確かに、あいつが言つたように、そのときの気分だったな。彼はそう思いながらも、いや気分だけではなかった、あいつのよさが判るのに、俺は一年半もかかつたのだ、とも考えた。ふいに、烈しい絶望感が、長瀬に地の底へと吸い込まれるような眩暈<sup>めまい</sup>をもたらしした。手

足が急激に冷たくなり、心臓の鼓動も速くなって息苦しかった。長瀬はその突発的な肉体の症状に怯えたが、気を取り直して、何を怯えることがあろう、俺は死を決意し、もはやその決意をひるがえす筈のない人間ではないかと言ひ聞かせた。おにぎりには手をつけず、絵美のベッドを指差し、「ベッドカバーの上に、ちょっと横にならせていただいてもいいでしょうか。女性のベッドに失礼ですが」

と言った。

「どうぞ。シートとベッドカバーが変わっただけで、これまで何人の人が寝たか想像もつかないくらい古いベッドですよ」

それは低いベッドで、横たわると灰色がかった漆喰しつぐいの天井がいやに高く見えた。

「変わった漆喰壁ですね。模様が浮き出てる。ただの線みたいだし、雪の結晶をデフォルメしてるみたいだし、冬の松葉みたいにも見える。一日の終わりに、こうやって壁や天井の模様を眺めると、いろんなことを考えるでしょうね。とくにひとり外国生活をしてると」

長瀬はそっと胸に手を当てがい、大きく息を吸った。動悸はおさまりつつあった。彼は、眩暈と動悸に襲われた際の恐怖を思い出し、あるいは、自分は生きたくて生きたくてたまらないのではなからうかと考えた。そうでなくてどうして、絶望感が突如肉体のリズムを乱し、その乱れに怯えたりするだろう。

「ええ。ですから出来るだけ部屋を明るくしようと思って、小学生の女の子が集めるみたいなお人形とか、いろんな植木とかを、あっちこちに飾ってますの」

そう言われて初めて、長瀬は幾つかの小さな人形に気づき、鏡台の横に置かれたマホガニーの物入れの上に、鉢植えの観葉植物が並んでいるのに気づいた。それはイングリッシュ・アイビーであった

り、アジアナムであったり、折鶴蘭であったり、長瀬の知らないもつれた紐みたいな植物であったりした。けれども、それらの配置によって、庄野絵美は女の匂いのする整頓された部屋の中で、いっそう孤影悄然としていた。

麻沙子が、日本茶と小皿に載せたおにぎりを持ってきてくれた。長瀬は礼を言い、ベッドから身を起こすと、そこに坐ったまま、中にかつおぶしの入っているおにぎりを食べた。

「俺は、あしたプラータで子供を遊ばせて、その子と母親に夕食をご馳走しなきゃいけないんだ」

とシギイが言った。うんざりした表情だったが、言葉つきには楽しそうなどころもあった。長瀬はその理由を訊き、赤毛の女運転手の、ひっきりなしに煙草を吸っていた姿を思い出し、また深い絶望感にひたった。

「ミチオも一緒に行かないか。子供を遊園地で遊ばせるのは疲れるよ。俺ひとりじゃあ、へとへとになる」

どうあっても、俺をひとりにさせたくないらしいな。長瀬はそう思ったが、何も答えず立ちあがった。

「あしたは、私、大使館へ行って、それから手紙を書くわ。姉にウィーンまで来ちゃったことだけは報告しとかなきゃいけないし、フランクフルトの八木夫妻も心配してると思うから」

麻沙子はそう言って、絵美と台所へ行った。おにぎりをチューインガムみたいに噛んでいるシギイに、長瀬は笑いながら訊いた。

「うまいか？」

「中に入ってるのは、ほんとに魚か？」

「そうさ。魚を干して、それを削ってあるんだ」

シギイは口の中のものを飲み下し、

「うまいような気がするね」

と答え、指にへばりついているご飯粒を、さてどう始末したものかといった顔つきで見やった。

「それは、そのまま食べるんだ。指を口に持っていていいってね」

長瀬が自分の指に付いているのを食べると、シギイは何度も頷きながら真似た。

「以前、一度だけ、マサコと日本料理店に行ったことがある。魚の干物以外は何でも食べられるよ。ナットウは、カラシをいっぱい入れて食べる。泣きながら食べた。あれは、泣きながらでないと食べられない」

長瀬は声をたてて笑った。

「トーフはどうだい」

「トーフは好きだ。俺の友だちに、あれを食べてやみつきになったやつがいる。ただ、そいつの食べ方を聞いたら、日本人は怖がるだろうな」

「すりつぶして、ヨーグルトみたいにして食べるのか？」

シギイは深刻な表情で長瀬を見つめ、

「ジャムを塗って食べるんだ。毎朝ね」

と言った。

絵美は、三人を通りのはずれまで送ってくれた。別れぎわ、長瀬は絵美の耳元でささやいた。

「R・Gさんの電話番号を覚えましょう」

電話を置いてある台の近くの漆喰壁に、何人かの知人のフルネームと電話番号を書いた紙が貼ってあり、その端にR・Gというイニシャルだけ記された部分がかった。長瀬は絵美の部屋を出るとき、

R・G氏の電話番号をちらっと見やったが、覚えてしまったわけではなかった。それが人の名ではなく、何かの店名であるかもしれないが、彼はそこにふたつの電話番号が並び、片方には赤いインクで曜日と時間が、片方には青いインクで時間だけが記されているのを見て、およその見当がついたのであった。

先に大通りへ出てタクシーを捜している麻沙子とシギイをそれとなく窺いながら、絵美は春物のコートと袴を立て、

「電話番号を覚えて、それでどうなさるおつもりですか？」

と訊いた。

「この世の置きみやげに、あなたとR・Gさんとの仲を裂いていこうかと思ってるんです」

絵美は微笑んだように見えた。しかし暗闇に漂うおぼろな光は、それが微笑ではなく、苦衷に歪んだもののようにも見えるのだった。

長瀬はホテルへ帰りたくなかった。ひとり、夜ふけのウィーンの街を歩いていたかった。二、三人の乗客しか乗っていない市電が遠ざかっていくのを、冬に逆戻りしたような冷気の中で見つめた。空のタクシーはいっこうにやってこなかった。彼は、車道にまで出て空のタクシーをみつめようとしているシギイを呼んだ。そして、歩み寄ってきたシギイに言った。

「俺をひとりにさせてくれないか。ひと晩、自由の身にしてくれ。ひとりになって、いろいろ考えてみたい」

「駄目だね。夜のウィーンは、雨のバリに似てる。人間をセンチメンタルにさせるよ」

シギイは低いが断固とした口調で言った。

「俺は、ほんとに死にたくない。生きていたいさ。当たり前えだろう？」

シギイは小さく頷いたが、それでもひとりにさせるわけにはいかないと言ひ張って譲らなかつた。「約束するよ。俺は今夜、娑をくもらしたりしないし、死んだりもしない。ほんとに、ひとりになつて考えたいんだ。ペーターが言ったことをね。地道にやり直す方法をだ」

それは口実であつた。約束すると言つた瞬間、長瀬は約束を破りそうな予感に駆られたのである。麻沙子とシギイはドイツ語で話し合つていた。ふたりのやりとりはだんだん烈しくなつた。絵美が何か言つた。シギイの目が鋭くなり、しばらく沈黙がつづいた。やつと空のタクシーがやってきた。シギイはタクシーを停めてから、

「俺は後悔したくないだけさ。あのとき、力ずくでも連れて帰つておけばよかった。そんな悔いを残したくないんだ。だけど、ミチオはその気になればホテルの中でも死ぬる。キヌコが寝たあと、カミソリで手首を切ることも出来るだろうし、首を吊ることだって出来るさ」

そう言つて肩をすくめ、麻沙子を先にタクシーに乗せると、絵美に、食事をご馳走になつたことへの礼を述べ、大声で運転手にホテルの名と所在地を告げた。長瀬は、タクシーが走りだすと同時に絵美と向かい合つて立つた。

「失礼なことばかり言いました。どうか許して下さい」

「いいえ。私、氣にしませんから」

長瀬は軽く一礼し、タクシーが去つたのとは反対の方向に歩き始めた。絵美の、急ぎ足で下宿へ戻つていく足音が聞こえた。シャッターの降りた店の前で、立つたままパンを食べている若者がいた。しばらく行くと、同じように暗がりで見つくり、何やらひとりごとを言っている老人がいた。長瀬は、一軒ぼつんとショーウィンドウに明かりを灯している観光客相手の、高級な小物類をあつかう店の前で立ち停まつた。象牙で作られた精巧なチェスの盤に見入り、地道にやり直せだって？ 四億六